

<h1>指導資料</h1>	<h1>音楽 第49号</h1>			
	対象校種	幼稚園	小学校	中学校
 鹿児島県総合教育センター 平成28年10月発行		高等学校	特別支援学校	

中学校音楽科における「表現」と「鑑賞」を関連付けた指導の工夫 —「日本の伝統音楽」に関する題材を通して—

音楽科の指導において、表現と鑑賞の二つの領域を関連付けて指導することは、学習指導要領に示されている指導内容を効果的・効率的に指導することにつながる。そこで、「日本の伝統音楽」に関する題材を使って、具体的な指導法を紹介する。

1 題材構成について

題材構成には、「歌唱」と「器楽」、「器楽」と「創作」など、表現領域の中で複数の分野を関連付ける方法や、「器楽」と「鑑賞」、「鑑賞」と「創作」など、表現と鑑賞の二つの領域を関連付ける方法がある。ここでは、「日本の伝統音楽」に関する題材を使って表現と鑑賞の二つの領域を関連付ける方法について示す。

2 表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成による効果について

「日本の伝統音楽」に関する題材において、短期研修講座等で、題材構成のパターンを変えて実践した結果、表現領域の「器楽」から鑑賞領域へ関連付けて構成すると、表現の技能と鑑賞の能力とが相乗して高まる効果があることが認められた。そこで、その具体的な指導法について紹介する。

3 表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成について

「器楽」と「鑑賞」を関連付けた題材構成とは、例えば、題材名を「^{そら}箏曲の特徴を感じ取って、その魅力を味わおう」と設定し、器楽曲「日本古謡『さくらさくら』」と鑑賞曲「箏曲『六段の調^{しらべ}』」の二つの教材を、一題材の中に構成する方法である。この二つの教材を一題材の中に関連付けるには、学習指導要領の共通事項（音色、旋律など表現及び鑑賞において共通に指導する内容）を、それぞれの領域に明確に設定し、指導することが大切である。

具体的には、日本古謡「さくらさくら」で、箏の基本的な調弦法や奏法を身に付けさせた上で、箏曲「六段の調」を鑑賞させると、箏曲の音の変化や日本の伝統音楽の固有の響きなどを、容易に捉えさせることができる。

4 表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成の授業展開例

(1) 題材名「箏曲の特徴を感じ取って、その魅力を味わおう」

(2) 題材の目標

ア 箏曲の特徴に関心をもち、音色、旋律、形式を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、主体的に箏を演奏したり鑑賞したりする。

イ 箏の特徴を感じ取って音楽表現を工夫し、どのように演奏するか、旋律をつくるかについて思いや意図をもつ。

ウ 箏の特徴を捉えた音楽表現をするために必要な、基礎的な奏法などの技能を身に付けて演奏する。

エ 箏曲「六段の調」の音楽を形づくっている音色、旋律、形式を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、よさや美しさを味わう。

(3) 本時の目標

箏曲の音色、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る。

(4) 本時の実際 (2 / 4)

過程	主な学習活動	時間	形態	指導上の留意点
導入	1 前時の「さくらさくら」で使った基本的な奏法や箏のいろいろな奏法について確認する。 (p. 3 「(1) 表現領域を鑑賞領域に関連付けるための器楽(箏)の指導」参照)	7分	一斉	○ 「さくらさくら」の基本的な奏法を確認させ、箏の音色の特徴や余韻の変化を振り返らせる。 ○ 左手の使い方や余韻が変化することや、いろいろな奏法の違いなどを振り返らせる。 ○ 平調子の音階を確認させる。
展開	2 本時の学習課題と学習の流れを把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">箏曲「六段の調」の音色の変化はどのようなものがあり、変化させるには、どのような奏法があるのだろうか。</div>	3分	一斉	○ 本時の目標と学習の流れを理解させる。 ・ 本時の目標は、箏曲「六段の調」を鑑賞し、箏の音色の特徴や音の変化には、どのようなものがあるかを聴き取ることを理解させる。
	3 箏曲「六段の調」の曲の冒頭部分を聴き、気付いたことを発表する。 (p. 3 「(2) 表現領域を鑑賞領域に関連付けるための鑑賞の指導」参照)	30分	個人	○ 音の特徴で気付いたことを記入させる。
	4 音の変化を聴き取る。 (図4「ワークシートの内容例」参照)		個人	○ ワークシートを使って、音の変化などを聴き取らせる。 ・ 音が重なっている。 ・ 音の終わりが変化している。など
5 音がどのように変化しているかを聴き取り、線で図示する。 (p. 3 図5「音の余韻の図示化例」参照)	個人		○ 気付いた音の変化を書き出し、どのように変化しているかを図示させる。	
開	6 線で示した音の変化は、箏をどのように演奏すればよいかを発表し、奏法を確認する。 (p. 3 図6「板書例」参照) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">音色の変化には、途中音の高さが高くなるものがある。それは左手を押すことにより、高くなるので、奏法は「後押し」である。など</div>	30分	グループ	○ 各自で聴き取った音の変化と線で図示したものを、グループ内で発表させる。 ・ 音高が途中から高くなっている。 ・ 音高が低くなってから戻っている。など ○ グループで出てきた変化を発表させ、その変化が箏のどの奏法になるかを確認させる。
	7 再度、鑑賞し音の変化と奏法を確認する。 8 次時の予告を聞く。		10分	一斉
終末				

5 表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成の指導法について

(1) 表現領域を鑑賞領域に関連付けるための器楽（箏）の指導

はじめに、箏の基本的な調弦法や奏法を指導し、「さくらさくら」を演奏させる（詳細は、「指導資料音楽第48号」を参照）。

次に、図1「後押し」（糸を押して音高を全音上げる）や、図2「引き色」（糸を柱の方に引き寄せて、音高を半音程度下げた後、元に戻す）など、音の余韻の変化を十分に感じ取らせながら、演奏させる。そして、図3「合わせ爪」（同時に二本の糸を弾く）などのいろいろな奏法についても、音色の特徴を感じ取らせながら演奏させる。



図1 後押し



図2 引き色



図3 合わせ爪

(2) 表現領域を鑑賞領域に関連付けるための鑑賞の指導

はじめに、箏曲「六段の調」の曲の冒頭部分を聴かせ、特に、音の高さや余韻の変化を、図4を基に聴き取らせ、図5を参考に図示させる。

箏曲「六段の調」鑑賞ワークシート

- ① 2曲を比較して聴いて、何か気付いたことがありますか。
- ② 音の高さや余韻は、どのように変化していましたか。
- ③ どのように変化していたか、線で図示しなさい。
- ④ 線で示した変化は、箏のどの奏法になりますか。

図4「ワークシートの内容例」

- ① 音の余韻の変化がない奏法
弾き始め  終わり
- ② 音の余韻が揺れている奏法
弾き始め  終わり

図5「音の余韻の図示化例」

次に、図示化した音の高さや余韻の変化を奏法とともに言葉で表現させる。その際、左手をどのように用いれば、図示化したように変化させることができるかを考えさせる（図6）。

最後に、演奏を聴いて、奏法を答えさせる。

弾き始め  終わり

生徒：右手で弾いて、その後、左手で糸を押すと、音の高さが高くなり、余韻が変化する

奏法：（ 後押し ）

図6「板書例」

以上のことから、表現領域（器楽）で身に付けた音の高さや余韻を変化させる箏の演奏技能を基に、鑑賞曲の中から「音の変化など」を聴き取り、奏法等を言語で説明させることで、表現と鑑賞を関連付けた指導が可能である。

(3) 「器楽」と「鑑賞」で学んだ内容を「創作」に関連付けた指導

(2)では、表現領域（器楽）の活動で学んだことを、鑑賞領域に関連させた実践例を示したが、本来は、表現と鑑賞の領域を相互に関わり合わせ、行きつ戻りつしながら深めていくことが大切である。その方法としては、「器楽」と「鑑賞」の活動を通して学んだことを、「創作」へ関連付ける題材構成が考えられる。

「器楽」、「鑑賞」で学んだことを「創作」へ関連付けさせる題材構成とは、「鑑賞」で聴き取ったり感じ取ったりしたことを、どのように表現に結び付けるかを言語等で説明しながら意見交換し、「器楽」で身に付けた技能を活用して、簡単な旋律などをつくることである。

具体的には、はじめに、箏曲「六段の調」で感じ取った日本の伝統音楽の固有の響きや雰囲気から「表現したいイメージ」を意見交換しながら設定する。例えば、「和食屋さんで流れる曲をつくろう」などである。次に日本の五音音階や箏で学習した平調子の「都節音階」など、様々な音階の中から、表現したいイメージに合った音階を選び、簡単な旋律をつくらせていく（「指導資料音楽第48号」参照）。

6 表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成の効率的な指導法について

音楽科の指導の現状は、歌唱に偏る傾向にあり、鑑賞と創作の充実が求められている。また、限られた授業時数の中で、各領域をバランスよく指導することは、大切なことである。そこで、本稿で示した「日本の伝統音楽」に係る題材において「器楽」、「鑑賞」、「創作」を関連付けて指導することは、生徒の関心・意欲を持続させつつ、学んだことを、相互に関わり合わせながら、深めていくことができ、それぞれの領域を別々に指導するよりも、効率よく指導を進めることができると考える。

表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成の工夫と指導について、「日本の伝統音楽」に係る題材を例に述べてきた。これを基に、他の題材における指導法の工夫にも努めていただきたい。

—参考文献—

- 文部科学省『指導計画の作成と学習指導の工夫』平成3年
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』平成20年，教育芸術社
- 文部科学省『高等学校学習指導要領芸術編（音楽）』平成20年，教育芸術社
- 鹿児島県総合教育センター『指導資料第1590号（音楽第48号）』平成28年4月

（教職研修課）